

学校法人 大阪滋慶学園

実践力と創造力ある医療人育成

学校法人大阪滋慶学園

浮舟 邦彦理事長

対談

JR大阪鉄道病院

上田 祐二院長

「実学教育」「人間教育」「国際教育」の3つの理念を柱に、数多くの医療人を輩出してきた大阪滋慶学園グループ。時代の要請に応え、2011年には医療安全管理学を研究する日本初の大学院を開校し、リスクマネジメントのスペシャリストを養成してきた。地方が抱える人材不足の課題にも取り組み島根、鳥取、岡山に医療看護の専門学校を設立。医療の現場が高度化、複雑化、専門化していくなか、新たな職種の育成も視野に入れる。産学連携の強化をめざしながら超高齢化社会に向けてどんな医療人を育成していくのか。同学園グループの浮舟邦彦理事長とJR大阪鉄道病院の上田祐二院長が語り合った。

人間力と国際的感性養う

——JR大阪鉄道病院では、大阪滋慶学園の卒業生はどのような職種で活躍されていますか

上田 現在は看護師と理学療法士、言語聴覚士に卒業生がおり、医事課長も大阪滋慶学園出身です。いずれも人間味あふれる人たちばかり。はじめに仕事に取り組み大変貴重な戦力になっています。

——優秀な学生を育成されている大阪滋慶学園の教育方針は

浮舟 当校は開校以来、「職業人教育を通して社会に貢献する」というミッションの下、実学教育、人間教育、国際教育の3つの理念を掲げてきました。即戦力となる専門技術を身につけてもらうのはもちろん、医療人として必要な人間力、そして国際的な感性を養うことを教育方針としています。他の価値観と文化を受け入れながら自分たちのアイデンティティーを確立することも大切。こうした考えに基づくカリキュラムを構成

し、社会に人材を送り出しています。

——人間教育に力を入れる理由と具体的な教育内容は

浮舟 国家試験に合格し業界のプロになるには知識と技術を身に付けることに加え、講義だけでは学べない「人間力」が必要。当学園の校内には、いたるところに「今日も笑顔で挨拶を」という標語が貼り出されていますが、これも人間教育の一環です。入学する前はきちんと挨拶ができるなかった学生でも、卒業するときには毎日笑顔で挨拶ができるようになります。挨拶が習慣になって身についているからです。国家試験に合格するのに必要な主体性も習慣の問題。まず、挨拶を習慣化するセルフマネジメント能力を養います。そして産学連携教育を通してチームマネジメントに必要なコミュニケーション力やリーダーシップ、フォローアップ、フェローシップを身につけていきます。そのためのキャリア教育委員会があり教職員による研究が進んでいま

うきふね・くにひこ
大阪滋慶学園理事長のほか、北海道から九州まで全国75校の専門学校や大学院大学、高校を運営する滋慶学園グループの総長。関西学院大学法卒。米国エコノミック・リーダーなど海外3大学から教育名譽博士号を授与され、日本医療秘書学会代表理事。77歳。



——医師になって33年目ですね

上田 15年ほど前までは、ほとんどが医師主導の現場でした。「コメディカル（医療スタッフ）は後から勝手についてこい」という未成熟な状況でした。その後「チーム医療」が成熟、定着し、医療の質は極めて高くなっています。大阪鉄道病院も「感染対策チーム」「緩和ケアチーム」「認知症対策チーム」「褥瘡対策チーム」など多くの医療チームが活躍しています。これらのチーム医療のリーダーは、医師よりもむしろ、認定看護師や薬剤師の場合が多く、多職種の専門性に起因する患者さんのための医療の質の向上のみならず、医師の負担軽減にも大いに貢献しています。また、国策として診療報酬でチーム医療の推進に誘導した厚生労働省の施策は極めて妥当だと思います。

医療人材の育成や医療機関の役割、グローバル化への対応など話題は尽きなかった



アジアからの留学生増加

——大阪滋慶学園では社会人や高齢者の入学が増加。海外提携校の数も群を抜いています。国際教育を重視する理由は。

浮舟 夜間の学科や資格によっては大学卒を条件にするコースもあるので、社会人の入学が増えています。大学から社会に出た後もキャリアを考え直したり、学び直したり、資格を取って仕事をしたいという動機で入学する人が増えてきています。

中国、台湾、香港、マレーシア、ペトナム、ネパールなどから留学生も増えています。中国の大学とは2001年から合弁学科を開設し、中国の医療人を養成してきました。日本の国家資格を取得し、臨床工学技士や看護師として日本で働いている人も大勢います。病院にとっては医療ツーリズムの運営にもつながり、海外進出や海外の医療機関との提携の際に貴重な人材として重宝される。

——訪日外国人が急増しています。医

療機関への影響は

上田 当院はJR天王寺駅前にあり、界隈は最近、外国人観光客でごった返していますが、不思議なことに外国人の受診は年に数えるほどです。ただ、東京五輪・パラリンピックを控えて増える訪日客に対する医療問題には、しっかり取り組んでいく必要があると思います。国の施策でも外国人診療の拠点病院を指定する動きがありますが、言語や未収金

など複雑な問題もある。本腰を入れて取り組むには覚悟と準備が必要です。また、親会社（JR西日本）がツーリズムを担う会社なので、医療ツーリズムへの参入を考慮する時が来るかもしれません。現在、外国人スタッフは在籍していませんが、浮舟理事長の話をお聞きして、多国籍人材の活用の必要性を再認識しました。

医療安全、感染対策に全力

——医療現場では安全や質の向上が大きなテーマ。JR大阪鉄道病院ではどのようなマネジメントを行っていますか。

上田 医療安全と感染対策の2つは、病院の安心運営のための最重要事項。医療安全管理室と感染対策室を院長直属の組織とし、医療安全管理室は医療安全管理部長である医師と医療安全管理者である副看護部長のツートップ体制にしています。傘下に計20人の多職種スタッフで構成する医療安全管理対策委員会

を組織し毎月インシデント、アクシデント報告を解析。同時に、医療機能評価機構の医療事故防止事業部から定期的に送られる情報を共有しています。また、医療安全管理対策委員会での検討事項や決定事項を伝達するため、各部門各所にリスクマネジャーを配置し、連絡会議を毎月開催。「レベル3b」以上のアクシデントが発生したときには「医療事故原因検討会」を立ち上げて、原因究明や対応などに迅速にあたります。

学校法人 大阪滋慶学園

地域に愛され、信頼される病院



うえだ・ゆうじ
研究科博士課程修了。1993年京都府立医科大学附属病院にて医師として勤務。
年次研修医として大阪府立大消化器外科学科にて1年間研修。
15年後、JR大阪鐵道病院にて内視鏡科医として勤務。
同副院長、院長としてJR大阪鐵道病院にて勤務。
現在はJR大阪鐵道病院院長として勤務。

— 医療の質のマネジメントは
上田 診療科、部門ごとの実績と推移をまとめた年報を毎年作成。病院内で確認、検討するとともに、近隣の医療機関にも送付しています。また、患者向けに病院指標をホームページで公表したり、院内向には年1回学術集会を開催し、多くの病院職員の前で発表する機会を設けたりしています。

— 医療安全管理の専門家を養成する大学院大学の研究内容は

浮舟 2011年に全国で初めて医療安全管理の修士課程である滋慶医療科学大学院大学を開校し、これまでに122人が修了した。リスクマネジメントをテーマとした「医療安全管理学」と「医療安全管理学の領域としての医療経営管理

学」の2つを研究しています。リスクマネジメントはいまや病院の経営問題に直結しており、医療安全の概念から医療事故を防ぎ事故後の対応もしなければなりません。

— 大学院では医療の現場で働く人が学んでいますね

浮舟 看護師とコミュニケーション、そして医師も入学します。それぞれに指導教官がついて課題を研究するので、学びながら職種間連携ができる。その点が特異な大学院といえます。修了後も医療安全管理学会で研究を続けていくので、研究者としてのキャリアにつながります。

上田 そうした取り組みには大変感謝を受けます。

リスク回避へ研修重ねる

浮舟 リスクマネジメントはどの業種でも重要になっていますが、とくに医療福祉ではリスクに直結します。リスクに対する認識と予防はもちろん常に研究、研修を重ねることも大事です。

上田 浮舟理事長の話を聞きし、日本の医療安全に関する資格制度の実態はまだ十分ではないと思いました。医療安全管理者は圧倒的に看護師が多く、それほど勉強しなくとも管理者になれる。試験の内容も含めて見直しの検討が必要だと思います。

— 地域医療も大きな課題です。大阪滋慶学園は近年、出雲と鳥取に相次いで看護学校を開校。今年4月には岡山県美作市に「美作市スポーツ医療看護専門学校」も開校されました

浮舟 出雲も鳥取も美作も地域の行政から要請されて開校しました。医療福祉は「地域産業」ながら、扱い手が都会に出て、なかなか帰ってこないという現状です。医療福祉の教育機関としては、やらなければならぬ取り組みを考えています。

後、大阪市南部医療圏の全区に広げていく予定です。

— 緩和ケア病棟について

上田 大阪市南部医療圏の対象人口は80万人ですが、緩和ケア病棟は東住吉区に1棟14床のみ。緩和ケア、看取りの問題が声高に言われているなか、地域からの要望を感じましたので、昨年11月、50床弱の急性期病棟1棟を19床全室個室

の緩和ケア病棟に機能転換しました。総病床数が減る痛みが伴う改装でしたが、国も大阪府も不要な急性期病棟を削減する方向ですので、時代に即した病院の姿に変えました。これによって急性期を中心、回復期、症状緩和期から「エンド・オブ・ライフ・ケア」まで途切ることなく、継続的ながん医療を提供できる体制になりました。

A I や先端技術にも対応

— 学校運営、病院運営について将来展望をそれぞれお聞かせください

浮舟 医療業界も大きく変化し、ドクター中心の病院内完結医療から地域包括医療へと移行しつつあります。医療福祉がますます高度化、複雑化、専門化していく中、職種間連携や地域連携が進んだことで、専門領域を持ちながらマネジメントできる人材の役割も重要な要素となっています。一方で、人工知能(AI)やロボット技術など最新技術が導入される時代です。新しい分野を担える職種がこれから登場するので、その人材育成にもチャレンジしていかたい。

— これまで培ってきた病院との連携は

浮舟 卒業生との連携や病院、企業との連携などこれまで産学連携で培ってきたことは当学園の大きな財産。今後、医療福祉の形が変わったとしても人材育成とキャリアアップは必要なわけで、社会の変化にしたがって人材育成の姿も変わらざるを得ないと考えています。人口が急増し、富裕層が増えているアジアにも需要があります。これまで専門学校は即戦力としての実践力を持った人材を育成してきましたが、これからは、そこにプラス創造力を発揮できる人材が社会で求められるようになります。高度専門職業人材を育成する専門職業大学を現在、検討中です。

産学連携で課題に取り組む

上田 当病院は社会インフラ企業であり、地域共生企業であるJR西日本の企業立病院です。「次の一步へ地域と共に」という本社スローガンの下、JR西日本の企業理念を大切にし、未来へ向けてより一層地域社会に貢献できる医療機関として発展していきたい。

— 医療機関として目指す姿は

上田 常に「地域に必要とされ、地域住民に愛され、信頼される病院」です。超高齢社会にふさわしい多機能型急性期病院としての役割を十分果たしていく上、今後も努力していきたいと

考えています。浮舟理事長と対談させていただき、私自身もずいぶんと視野が広がりました。これまで医療スタッフの採用も閉鎖的だったかなと思う。大阪滋慶学園がどういった教育理念で学生を社会に送り出されているのか理解できましたし、将来に向けていろんな可能性を持っておられることにも感銘を受けました。また、われわれももっと勉強する必要があることに気づかされました。

浮舟 これを機に、産学連携でさまざまな課題に対して実践的に取り組んでいけたらと思います。



上田院長
対談を終えて握手を交わす浮舟理事長(左)と

■JR大阪鉄道病院
1915年設立。旧国鉄職員とその家族のための職域病院として設立され、82年に地域住民のための一一般診療を開始。87年の国鉄分割民営化に伴い、JR西日本直営の病院とな

る。大阪市南部(主に阿倍野区、東住吉区、平野区)エリアの中核を担う急性期病院で、診療科は22科、病床数303床。住所は大阪市阿倍野区松崎町1-2-22。